

手元に残しておきたい本リスト



books 電線の鳥①

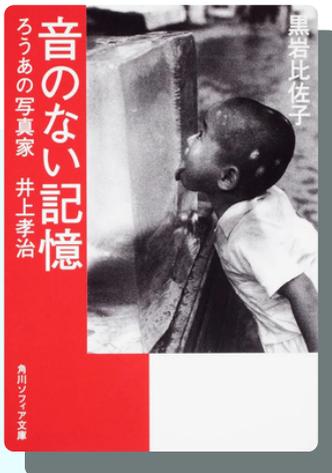
『サキ短編集』

サキ／著、中村 能夫／訳 新潮社

40年以上も前の話です。私は、予備校に通うために上京し、7歳上の兄（故人）が住んでいた下宿に同居することになりました。八畳間の西壁面が全て本棚になっていて、その中にあったのが本書です。兄は「これ、面白いよ」と、『二十日鼠』など何編かの内容を紹介してくれました。

短編の名手と並び称されるO・ヘンリーの人情噺とは異なり、淡々と気取った文体が醸し出すユーモアと突如暗転するような結末に至るプロットが見事で、（今はデザインが変わっていますが）表紙に使われた作者の、いかにも酷薄伶俐な風貌にも惹きつけられました。

人物のキャラクターや設定など、時に無理やりな感じもするのですが、人間の真実をくだしい内面描写を用いずに描いていて、その突き放した冷たさがかえって心地よく、気持ちが落ち着くのです。訳者による解説も、どこことなく素っ気なくて、本編にマッチしていますね。



books 電線の鳥②

『音のない記憶』

黒岩 比佐子／著 文藝春秋

井上孝治（1919-1993）は、ろうあというハンディキャップを乗り越え、写真を通じてろうあ者の地位向上に尽力し、「アルル国際写真フェスティバル」に招待されるまでになった在野の写真家です。

著者が井上を知ったのは1989年、福岡の百貨店「岩田屋」のキャンペーン広告「思い出の街」でした。その情熱と活力に溢れた生涯を描いたのが本書で、著者のデビュー作です。

井上の写真の多くは、市井の人々を生き生きと捉えたスナップですが、同時に報道写真的でもあり、どれも緊迫感が素晴らしいです。また、返還前の沖縄の様子など資料的価値の高い作品も残しました。

著者の文章はケレン味のない実直なものですが、その底に対象への熱い共感を滲ませ、また、資料を丹念に読むことで新事実を掘り起こす手腕はスリリングですらあります。2010年に膵臓癌で逝去するまでの約10年に亘り、良質なノンフィクションを発表し続けました。



手元に残しておきたい本リスト



books 電線の鳥③

『プリズン・ブック・クラブ』
アン・ウォームズリー／著、向井 和美／訳
紀伊国屋書店

著者の友人キャロル・フィンレイは、カナダ各地の刑務所で読書会を運営する活動をしています。本書冒頭、著者は読書会運営を手伝うよう頼まれます。担当するコリンズ・ベイ刑務所は受刑者全てが男性で、殺人犯や強盗犯もいました。「絶対無理」と思うのですが、長く雑誌記者を勤めていた著者の好奇心が恐怖を上回り、手伝うことに。

読書会は月1回の課題図書形式で、『怒りの葡萄』などの名作をはじめ、かなり重厚な本ばかり。読書会メンバーは、しっかり読み込んできて論点を立て、時には犯罪者ならではの観点から率直に対話します。会を重ねる毎に、各受刑者の背景や個性が見えてくるのが本書の読みどころで、中には著者に自分の弱さを吐露する者もいて、その姿は感動的です。

今後は、読書会に参加したつもりで、本書の課題図書を読んでいこうかな、と思います。



NO IMAGE

books 電線の鳥④

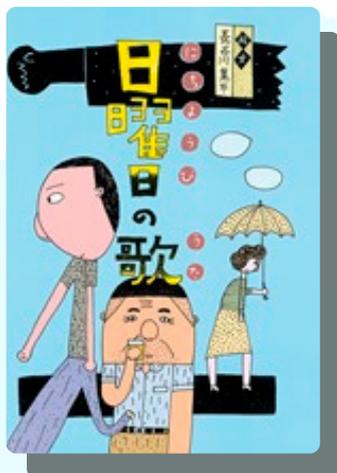
『黒いTシャツと青い人生相談』
チップエクトン&アウトサイダーボイス／著
広報社

人生相談本の回答者は、殆ど全てが著名人です。回答者のキャラクターや価値観を、人生相談というフォーマットを通して楽しんだり、回答者が成功者の場合、その照り返しで回答を信じたり…。

無名のアメリカ人チップさんが日本の若者の悩みに答える本書は、その点実にユニークです。ウェブサイトoutsidervoice.comの企画を書籍化したもので、回答中のフレーズのいくつかは、黒いTシャツにデザインされました。私は「一般的にはどうなのか、みたいなことは、結局、重要なことではない。」が、とても好きです。

同氏は「自分の尊厳を保つこと」「最後は自分で決断すること」を基調に、丁寧に、適度な親密さで回答しています。そもそも、回答者の知名度と回答の質は相関するとは限らず、私は、本書を人生相談本の知られざる名著だと思います。日英併記なので、英語の勉強にもなりますよ

手元に残しておきたい本リスト



books 電線の鳥⑤

『日曜日の歌』

長谷川 集平／絵・文 好学社

ある少年の日常を絵日記の体裁で描いた絵本です。

主人公の「ぼく」は冒頭から、級友を殴る、隣家の女の子を泣かす、果ては万引きと次々に問題を起こし、その度に両親が頭を下げて回りますが「ぼく」に反省の色は見えない。でも、ご飯も一緒に食べるし、映画も皆で観に行く。

家族とは、こんなものではないでしょうか？

淡々とした描写が続いて、最後に爆発が訪れます。日曜日の草野球。試合は父親の痛恨のエラーで負けてしまう。悔しさと従前の非行が引き金となり怒鳴り合う父子。そして最後の見開きで、初めて一家三人が読者と正対し、がなるように歌う。歌詞は示されません。

なぜ、ここで歌うのか？ 飛躍した展開ですが、いつ読んでもここで不思議なカタルシスを覚えます。

そして、作者が長く活動するロックミュージシャンでもあることを考えると、裏設定的な歌があるのでは？ と、とても気になるのです。



ブックスエコーロケーション①

『アブソルート・コールド』

結城 充考／著 早川書房

生命工学と情報技術を独占して都市を統治する大企業・佐久間種苗を襲った細菌テロは、100名超えの研究員を殺害する—遠未来の企業都市を舞台に、バイオテロの犯人を追うミステリの構造で読む手が止まらない、サイバーパンクSF。

手元に残しておきたい本リスト



ブックスエコーロケーション②

『舟を編む』

三浦 しをん／著 光文社

流暢な文体に、都市と技術（テック）のディテール、ぐいぐい読ませられるアクションと、魅力的なキャラクターたちが織り成す先の読めないストーリー、そして、これからの人間とAIの関係性をも描き出す、傑作エンターテインメントです。



ブックスエコーロケーション③

『魔法治療師のティーショップ』

シャンナ・スウェンドソン／著、今泉 敦子／訳
東京創元社

図書館で借りて読み、この本は手元に置いておきたいと強く思っ
て購入。まさに手元に残しておきたい一冊。

治療師（ヒーラー）の主人公がなんともいえず好きだ。穏やかな

中にミステリ要素もありつつ、自分の心の傷を癒したり恋に落ちたり。

他の登場人物のキャラクターもとてもよかった。特に、隣人のメアが明るく豪快で主人公を照らしてくれる。

3月に続編が出るのを楽しみにしている。

手元に残しておきたい本リスト



枯淡苑

『飛行機しゅっぱつ!』

鎌田 歩／作 福音館書店



わが家で、こどもの成長と親子の共通言語をつくってくれている一冊です。

3歳の娘はスカイパークに通ううちに、飛行機が大好きになりました。この本を図書館で何度も借り、丁寧に読み続ける姿を見て、「やっぱり手元に置いておきたいな」と思っていたところ、たまたま古本買取で伺ったお宅で手に入れることができました。出かける直前にぐずっていて、機嫌取りとして手渡したときの、あのニコニコ顔が忘れられません。

松本では、スカイパークのおかげで実際に動いている飛行機を近くで見られるのも魅力です。絵本に描かれている場面を、思い立ったらすぐ本物で確かめられるのはとてもありがたいです。

本書の見どころでもある、荷物の積み下ろしや給油など、地上スタッフの作業を家族で強風のなか眺めた時間も、今では大切な思い出になっています。

「パッセンジャーボーディングブリッジ」「客室乗務員」など、少し難しい言葉も自然と覚えていきました。知りたいことが出てくると、親に聞いて言葉の響きを確かめる。好きなものを入り口に、言葉の世界がどんどん広がっていくのを感じられました。

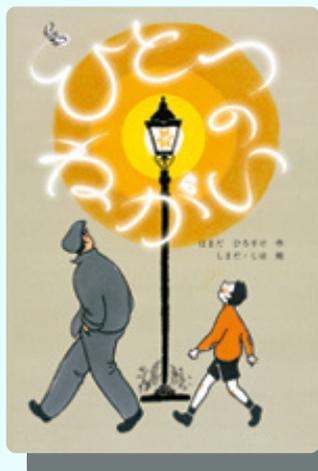
子どもがこの本を読む姿を見ていると、自分の中の「読書のあり方」が揺さぶられます。文字を正しく追うこと。行間を読むこと。精読すること。それが“良い読み方”だと思い込みがちですが、子どもは文字が読めなくても、絵を見ながら何度も物語をつくり直します。

ページを行き来し、好きなもの、気になるものを見つけ、自由な発想で自分の世界を声に出して語る。楽しさを自ら生み出していくその姿は、大人になると忘れてしまいがちな感覚を思い出させてくれます。

作者は松本出身。飛行機をテーマにした作品には、成田空港を舞台にした『巨大空港』もあります。こちらはより大きな判型で、ダイナミックな迫力が楽しめます。



手元に残しておきたい本リスト



親子で楽しむ本棚 ふくみ①

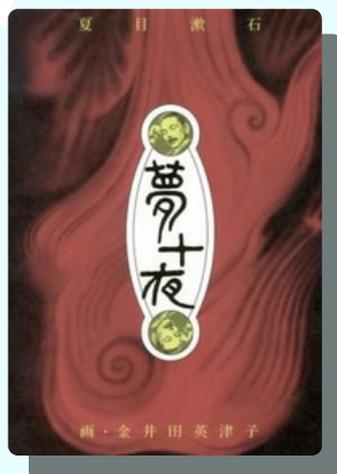
『ひとつのねがい』

はまだ ひろすけ／作、しまだ しほ／絵
理論社

子どもに読み聞かせながら、思わず涙した一冊です。
街角に立つ年老いた一本の街灯。その街灯には、長年抱き続けたたったひとつのねがいがありました。

そのねがいと向き合い続けた末に訪れる結末を、多くの方に読んで
いただきたいです。

そっと包み込んでくれる、切なくも温かい物語。大人の方にも、ぜひ手に取っていただきたいです。



親子で楽しむ本棚 ふくみ②

『夢十夜』

夏目 漱石／作 金井田 英津子／画 パロル舎

十の夢の物語から成る夏目漱石の短編集。
『こんな夢を見た。』という書き出しも、とても印象的です。
初めて第一夜を読んだとき、僅かな文字数の中に美しく壮大に広がる世界の虜になりました。

かと思えば、ぞわりと鳥肌が立つ恐怖感ある夢も。

十の夢を通して、各話ごとにさまざまな読後感や印象があることも、魅力の一つではないでしょうか。

怪しくも美しく幻想的。何度でも読み返したくなる一冊だと思います。

手元に残しておきたい本リスト

山山食堂



『旅をする木』

星野 道夫 文藝春秋

『沼地のある森を抜けて』

梨木 香歩 新潮社



『風の谷のナウシカ』

宮崎 駿/[著] 徳間書店

『熊とにんげん』

ライナー・チムニク/作・絵、上田 真而子/訳
徳間書店



日常に追われ、大きな声ばかりが届く日々を過ごしていると、僕はついつい大切にしたい
思いを忘れてしまいます。そんな時、自分を省みる機会を与えてくれるのがこの4冊です。

また、身の周りや、世の中の大きな憂いに心が持っていかれそうになった時、一度立ち止
まるために手にとるのもこの4冊です。

この4冊には、僕が大切にしたい点在する思いが、線となって語られています。

そして、また、僕は山に登ります。

本と山は、僕にとって様々なことを再認識させてくれる場所であり、様々なことを気づか
せてくれる場所です。

手元に残しておきたい本リスト

サパンジ

『さよなら私』

みうら じゅん／著 角川書店

『捨てられないTシャツ』

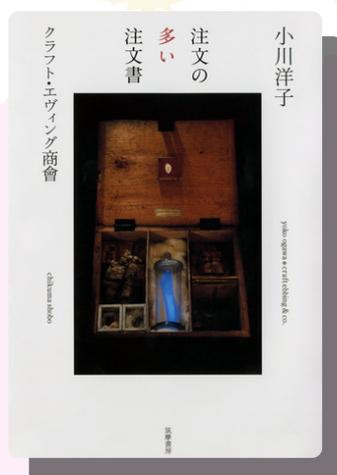
都築 響一／編 筑摩書房



『手元に置いておきたい本、出会えます』 サパンジのレジ前にあるポップの文面である。なぜか、書籍の販売もするパン屋の店主がセレクトした本達が、もはやメインのパンの販売面積を超えそうな量で店内に並んでいる。冒頭の謳い文句が示す通り、どの本だって『手元に残しておきたい本』に足る本だと思うが、このテーマであえて「オススメは？」と言われると、この二冊。

昨今、「個性、個性」と下手をすると個性的であることを強要されているようにも感じられ、その結果「個性」と「奇抜」と「逆張り」を混同しかねず、息苦しさを抱える人も少なくないのではないだろうか？

本当の「個性」ってそんな格好の良いものではなく、逃れられない自分の根っこの部分でことを潔く教えてくれるこの2冊（しかも、読み物としてシンプルに面白い）読後に今よりいっくらか生きやすくなる人は少なくないのではなからうか。あなたの「さよなら」したいけど「捨てられない、「手元に残らざるを得ない」何かに想いをはせてみては？



中央図書館 司書

『注文の多い注文書』

小川洋子&クラフト・エヴィング商会／著 筑摩書房

川端康成『たんぽぽ』、J.D.サリンジャー『バナナフィッシュにうってつけの日』、村上春樹『貧乏な叔母さんの話』など、実在する小説をモチーフにした「この世に存在しない物」の搜索を小川洋子がクラフト・エヴィング商会に依頼するという、少しふしぎな短編集です。読んでいるうちに現実と虚構の境界が曖昧になっていく、唯一無二の読書体験ができる一冊です。

わたしが初めてこの作品を手にとったのは図書館でしたが、美しい装幀や想像力を掻き立てられる写真たちにとってもわくわくし、自分の蔵書にも加えました。

手元に残しておきたい本リスト



中央図書館 職員

『かぜのでんわ』

いもと ようこ／作・絵 金の星社

東日本大震災の後、岩手県大槌町に設置された「風の電話ボックス」をモデルにした絵本です。

山の上に置かれた電話。でもその電話は線が繋がっていません。誰でも自由に使えて、今ではそばにいない人に思いを伝えること

ことができます。

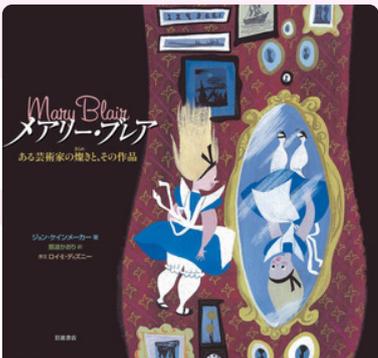
涙が出ますが、心に寄り添ってくれてじんわりとする絵本なので、大人の方にもぜひ読んでいただきたいです。我が家の子供達は大きくなってしまいましたが、今でも本棚に残っている絵本の一つです。



あがたの森図書館 司書

『メアリー・ブレア』

ジョン・ケインメーカー／著、那波 かおり／訳
岩波書店



手元に置いてずっと眺めていたい本を考えた時、思い当たったのがこの本でした。メアリー・ブレアは、ディズニー作品のデザイン担当アーティストであり、ディズニーランドの人気アトラクション“イッツアスモールワールド”のデザインを手がけた方です。あの素敵なデザイン

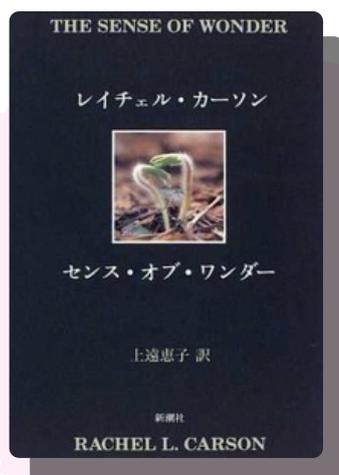
は一体どんな方が作り上げたのかをずっと知りたいと思っていたのですが、この本に巡り合えたときはとても嬉しかったです。

彼女の初期の作品から晩年の作品まで鑑賞すると、彼女の中にある色彩の鮮やかさ、発想の豊かさ、多彩な色のイメージの源泉が初期からあったことが感じられます。

そして彼女の絵の中には物語が隠れています。

アニメーションを見たことがある方ならこのシーンは彼女のアイデアだったのか！と驚きと同時に彼女のコンセプトの素晴らしさに気付けると思います。

手元に残しておきたい本リスト



あがたの森図書館 司書

『センス・オブ・ワンダー』

レイチェル・カーソン／著、上遠 恵子／訳 新潮社

初版は、1991年に佑学社から出版されています。著者のレイチェルと甥のロジャーが、メイン州の海辺で過ごした体験をもとに描かれた作品です。

夜通し月を眺めたり、雨の森を散歩したり…自然の神秘を発見する喜びは尽きることがありません。いつ読んでも同じ場所に立ち返ることができる、かけがえのない一冊です。

時が流れても変わることのない生命の輝きに、目を見はり、耳を傾ける—センスオブワンダーを失くさないでいたい。

図書館にある英語版も、ぜひご覧ください。とても美しい写真が見どころです。

